

四九年に引き揚げ、名古屋で特許事務所を開く。晩年は長男が働く横浜の会社の技術嘱託をしていた。

エスペランチストであった。それも、わが国では長老格の一人。

エスペラントは十九世紀末に帝政ロシアの支配下にあったポーランドの眼科医ザメンホフによって考案された、民族間の差別や対立をなくすための国際語だ。その普及を目指すエスペラント運動の根底にあるのは諸民族間の平和、すなわちインターナショナルイズム、国際主義、といっている。

由比さんがエスペラントを学び始めたのは一九二一年（大正十年）一九二二年（昭和七年）には名古屋エスペラント会の創立にも参加。戦後は原水爆禁止運動に加わり、被爆者の体験記をエスペラント語訳して海外に紹介した。焼身の日直前まで、朝日新聞に連載された、本多勝一記者のベトナム戦争ルポ『戦場の村』をエスペラント語訳するためにタイプライターに向かっていたという。

日本政府への憤りが焼身抗議という極限の形態にまで登り詰めたのには、米国のアリス・ハーズ夫人からの影響があったのでは、との見方がある。

アリス・ハーズ夫人は一九六五年三月、米国のデトロイト市で、ジョンソン大統領のベトナム政策に抗議して焼身自殺したエスペランチスト。絶対平和主義で知られるキリスト教の一派のクエーカー教徒だった。彼女の死後、彼女が生存中、芝田進午・法政大教授にあてた書簡が同教授の編訳で『われ

それから、さらに十三年の歳月が流れた。なのに、私には三十八年前の由比さんの問いかけは今なお光を失っていないのではないか、と思えてならない。

まず、国連決議がないまま、世界の多くの民衆の声の無視してイラク攻撃を強行したブッシュ政権。開戦の根拠とした「大量破壊兵器の存在」が間違いであったことを自ら認めざるを得なくなったのに、今なお軍隊の駐留を続ける米政府。それを支持し、自らもイラクへの自衛隊派遣を続ける日本政府。そして、沖縄には今なお巨大な米軍基地が存在し、基地の撤去、あるいは縮小を求める沖縄県民の声はいよいよ高い。由比さんが身をもって抗議したところと、状況は基本的に変わっていない、と私には思える。

近年、由比さんのことを今一度思い起こそうという人たちが現れてきたことは、なんとも心強い。東海大学出版会発行の雑誌『望星』に二〇〇三年十二月号から三回にわたって「いま、よみがえる老エスペランチスト由比忠之進の問い」が載った。ジャーナリスト・吉田敏浩氏のルポで、多くの示唆を受けた。

炎となりて』としてまとめられ、青木書店から刊行された。エスペランチストの由比さんもこれを読んでいたらう、というわけである。

由比さんの死は多くの市民に衝撃を与えた。一カ月後の十二月十一日夜には、由比さんを偲ぶ会が、芸術院会員上岐善磨らが発起人となり、東京・三宅坂の社会文化会館で開かれた。エスペラント学会員、政党関係者、一般市民ら五百人が集まった。私はここで、本多勝一記者からの追悼の言葉を代読した。本多記者が出張か何かの用で参列できず、市民の立場で参加した私に託したからである。

しかし、由比さんの「死をもつての抗議」は、人々の記憶から急速に薄れていった。とりわけ、七二年に沖縄の本土復帰が実現し、七三年にベトナムで戦火がやむと、由比さんはすっかり忘れ去られた存在となった。

由比さんの死から二十五年たった九二年十月、由比さんの長女、蔵園正枝さんと話をする機会があった。由比さんを含む三人のエスペランチストについて書くよう月刊誌『軍縮問題資料』の編集部に勧められ、その取材のために訪れた。蔵園さんは東京・練馬区に住んでいた。インタビュウできたのは短時間だったが、彼女はこう語った。

「もうそんなにたちましたか。父の死が無駄だったとは思

また、沖縄在住のジャーナリスト・比嘉康文氏は、ここ数年、由比さんの評伝を書くべく、資料収集に奔走している。

「由比さんは、沖縄にとつて忘れられない人だから」という。一日も早い完成が待たれる。

(二〇〇五年十二月二十八日)

第59回 米空母 イントレピッド からの 脱走兵

一九六七年十一月十三日午後五時すぎ。東京・神田一ツ橋の学士会館の一室には、緊迫感と熱気がみなぎっていた。一室を埋めていたのは内外の報道陣で、ざっと百二十人。「横須賀に停泊していた米空母から、四人の米兵がベトナム戦争に反対して脱走したので、その件について発表します」というベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）からの連絡で急ぎよ集まってきた記者やカメラマンだった。

会見に現れたのはベ平連代表で作家の小田実、同志社大教授の鶴見俊輔、評論家の栗原幸夫、ベ平連事務局長の吉川勇一の各氏ら。



ベ平連のデモ (東京都内で。小林やすさん提供)

ベ平連によると、北ベトナム爆撃作戦に参加していた米空母イントレピッド(四、二〇〇トン)が十月十七日に横須賀に入港、同二十四日出港したが、この間に四人の航空兵が同艦から脱走した。四人が最初に接触したのは日本人のベトナム反戦運動関係者だったが、その人からベ平連に連絡があり、ベ平連のメンバーが東京で四人に会ったという。

「四人の米兵がベトナム戦争に反対し、言葉でなく行動で示した動画を映画を通じて説明します」。早口の小田氏がこうまくしたてると、会場にセツトされていた映写機が回り始めた。にわかづくりのスクリーンにモノクロの画面が写しだされた。

まず、小田氏が英字紙の紙面を示す。十月三十一日に行われた故吉田茂・元首相の国葬の写真が掲載されているから翌十一月一日付の紙面と思われた。続いて胸に名札をつけた四人の米兵の姿。みな気楽な服装だ。脱走後に軍服を破棄したのだという。いずれも十九歳から二十歳。そのせいか、まだあどけなさが残る顔つきで、目をしきりにしばたたく。みるからに不安そうだ。

画面に合わせて録音テープが回る。四人はそれぞれ声明文を読み上げる。「ベトナム戦争を支持する側に身をおいたことは道徳に反し、まったく非人間的だったと思う」「私はアメリカ人。二度と戻れないだろうと思えば、友人や家族から離れることは心痛む」……

録音は小田氏との一問一答に移る。「後どのくらいで除隊になるのか」との問いに「二年二カ月」「八カ月」などと答える。四人の背後には、撮影場所をさとられないために、暗幕が張りめぐらされていた。

フィルムは約四十分。会場が明るくなると、すかさず報道陣から質問が飛んだ。「映画とテープは本物か」と外国人記者。小田氏はじろりとにらみつけて「本物だ」と一言。「四人は日本にいるのか」との問いには「知らない」。「当局が四人を引き渡せと言ってきたらどうするのか」との質問には「日本国憲法に基づいて行動するまでだ」と切りかえす。

矢継ぎ早の、しかも、しつような質問に、小田氏らの回答は極めて慎重かつ細心だった。なにしろ、米軍から集団脱走した米兵を、政治亡命を認めない日本で、日本人がかくまうなんてことは前例のないことであり、したがって米軍や日本の捜査当局から引き渡し要求があるかもしれない。脱走米兵の身の安全を最優先しなければならぬベ平連としては、慎重を期さざるをえなかったことだろう。鶴見氏が言った。「小田は、このことに生命をかけているんだ」

脱走した四人はどこにかくまわれているのか。さまざま憶測がマスコミで渦巻く中、十一月二十一日、四人が突然、ソ連のモスクワ・テレビに登場し、世界に衝撃を与える。四人はソ連人のインタビューに「われわれは平和運動をするた

めにどこか中立国へ行く途中、ソ連援助を期待してここにきた」と述べた。

「彼らはいったいどんなルートでソ連に渡ったのか」。マスコミは、今度はそのルートの取材に追われたが、十一月十一日に横浜を出港し、十三日にソ連のナホトカに入港したソ連船「バイカル号」に乗船したのでは、との観測が強かった。とすれば、当然、彼らの乗船を手助けした人たちがいるはず。それはだれなのか、どんな組織がかかわっているのか。マスコミはまたその解明に躍起となったが、ついに確たることは分からずじまいだった。

その後、四人は十二月二十九日、スウェーデンのストックホルムに到着し、二度世界を驚かす。

この脱走兵援助により、ベ平連はがぜん、有名になった。脱走兵援助に関する報道を通じて「ベ平連」の名前が人々の間に広く浸透したからだった。「ベヘーレン」という耳慣れない略称も人々の関心を呼んだ。因だったろう。

ベ平連が結成されたのは六五年四月二十四日のことだ。米軍機による北ベトナムへの爆撃(北爆)が始まり、ベトナム戦争が一段とエスカレーションした同年二月七日直後のことである。

この日、小田実、鶴見俊輔、作家の開高健各氏らの呼びかけで、ベトナムの平和を要求する人たち約千五百人が東京・清水谷公園に集まり、デモ行進の後、発足した。この日、参

加者に配られたパンフレットには小田氏が次のような一文を寄せていたが、それがベ平連の性格を端的に語っていた。

「私たちは、ふつうの市民です。ふつうの市民とは、会社員がいて、小学校の先生がいて、新聞記者がいて、花屋さんがいて、小説を書く男がいて、英語を勉強している青年がいて、つまりこのパンフレットを読むあなた自身がいて……その私たちが言いたいことはただ一つ、ベトナムに平和を！」

発足時は「ベトナムに平和を！市民・文化団体連合」と名乗った。やがて「ベトナムに平和を！市民連合」と改める。スローガンは三つ。「ベトナムに平和を！」「ベトナムをベトナム人の手に！」「日本政府は戦争に協力するな！」。これに賛同する人ならだれでも参加できるとされた。したがって、会員制度ではなかったし、規約も会費もなかった。「おれがベ平連だと名乗れば、それでもうベ平連なんですよ」「ベ平連は組織というよりは運動体です」。ベ平連関係者は当時、取材に行った私にそう語ったものだ。最盛期には、全国にベ平連を名乗るグループが四百もあった。

事務局長だった吉川勇一氏は、その著『市民運動の宿題』（一九九一年、思想の科学社）の中で、こう書いている。

「参加者の思想的な立場は、マルクス主義、プラグマチズム、アナーキズム、社会民主主義、自由主義、戦闘的キリスト教、良心的日和見主義（？）、大衆運動主義と実にさまざまだった。職業や専門分野も、作家、哲学者、数学者、ジャーナリスト、弁護士、高校の歴史教師、失業者、学生といった具合から自立した人々による「市民社会」が六〇年代になってようやく形成されつつあったということだろう。

運動のスタイルも、それまでの平和団体とは全く違っていた。

まず、米国のニューヨーク・タイムズ紙に一ページのベトナム反戦広告を掲載（六五年四月）。ついで、戦争と平和を考える徹夜討論会（同年八月）。同年九月からは、毎月一回の定例デモを始めた。その後も、米国の平和活動家を招いて日米市民会議を開いたり、フランスの哲学者サルトル、ポーボワールを交えて反戦討論会を開いたり、米国の歌手、ジョーン・バエズを招いて反戦の夕べを開いたり……。そして、米艦からの脱走兵援助。次々に打ち出されたこうした斬新な発想と行動が世間の度肝を抜いた。

それまでの労組や平和団体による平和運動は、まず、指導部が方針を決め、その実施のために組織や団体の構成員を動員し、構成員は指導部の指示に基づいて行動するというパターンだった。これだと、自ずと、いわゆる「スケジュール闘争」になる。これに対し、ベ平連の運動は、個人が自分の判断で自主的に参加するという行き方。こうした多様な市民個人の自発性と創意、自主性に基づく運動だったからこそ、世間の度肝を抜く斬新な運動スタイルを生み出したのだと私は思う。

で、そういう顔ぶれがベトナム戦争やデモに限らず、森羅万象を取り上げて、甲論乙駁した」

それまで大衆運動を取材対象としてきた者の目には、ベ平連の登場は実に新鮮に映った。まず、「市民」の連合、という点だった。それまでの平和運動は、労働者を主体とする労働組合や民主団体を中心。それにひきかえ、ベ平連は個々の市民が主体の運動だった。そのこが、従来の平和運動とは基本的に違うという印象を与え、新鮮さを感じさせたのだった。そもそも、「市民」という言葉そのものが、このころ、極めて新鮮だった。当時は、「市民」という呼称がまだ日本社会に定着しておらず、社会の構成員をさす言葉としては専ら「庶民」「住民」「人民」「民衆」などが使われていた。そして、「市民」に対しては、一般的に西欧の社会を形成している人々、つまり、貴族、僧侶など封建社会の支配層を打倒した商人、企業家、職人らのことをさすと理解されていた。

こうした歴史的経緯から、「市民」とは、権力とか権威から独立し、あくまでも個人の自由な判断に基づいた自主的な行動を尊重する人々のことだ、とイメージされていた。が、日本はブルジョア革命（市民革命）を経験していない。したがって、「市民」は不在とされていたわけである。

なのに、「市民の連合」を掲げる平和運動体が登場した。だから、「新しい運動」という印象を与えた。日本でも、経済の高度成長にともない、地域や職場を基盤とする共同体が息つくまもない「激動の三日間」だった。（二〇〇六年一月七日記）

第60回 脱走米兵と暮らす

「特ダネを書きたい」。新聞記者なら、だれでもそう思う。私もそうだった。世間が関心を示す事件や問題が発生した時にはとくにそう思ったものだ。

「脱走米兵にインタビューしてみたい」。

一九六七年十一月十三日、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）から、横須賀に入港中だったベトナム作戦従事中の米空母イントレピッドから航空兵四人がベトナム戦争に反対して集団脱走した、との発表があり、世間に衝撃を与えた。四

人はその後、ソ連の首都モスクワのテレビに姿を現し、十二月にはそろって北欧のスウェーデンに入国した。

騒ぎはそれだけにとどまらなかった。日本に休暇で滞在中のベトナム帰還米兵が次々と脱走したのだ。そのたびに、ベ平連によってその事実が公表された。ベ平連が、米兵たちに積極的に軍離脱をうながし、脱走してきた米兵をかくまい、海外に脱出させているのは明らかだった。

米軍や日本の警備当局もこれには神経をとがらせるに至ったようだ。元ベ平連事務局長の吉川勇一氏によると、六八年の暮れ、米軍のスパイが脱走兵だといってベ平連関係者に接触してきた。この人物の密告から、脱走兵を乗せた車を運転していた青年が北海道で逮捕されたり、関連してベ平連の間がピストル不法所持という虚偽の容疑で家宅捜査を受けたりしたという。

脱走兵の続出に私の中の「特ダネ意識」が頭をもたげた。

「一度、脱走兵にじかにインタビューしてみたい」

七〇年三月、吉川事務局長にその旨を伝えた。すると、「JATTEC（米反戦脱走兵援助日本技術委員会）のメンバーに会うように」と一人の人物を紹介された。小中陽太郎氏（作家）だった。小中氏の自宅を訪ねて希望を伝えると、「わかった。会わせましょう」との返事。ただ、条件があるという。「脱走兵を会わせるとなると、そのために何人かの人が動かなくてはならない。経費がかかるから、取材協力費をい

ろを振り向いては目をこらす。尾行が気になるのだろうか。

車は二時間以上走り続けて、広い道路ぞいのごく普通の木造二階建ての民家の前にとまった。東京都下の町田市の住宅地だった。

屋内には明るい電灯が輝く。が、窓という窓には厚いカーテンがかかっていた。応接室に外国人が一人。紺のセーターにネズミ色の背広と黒いズボン。赤茶けたボサボサ髪に長く伸びたあごひげ。黒縁の眼鏡の奥から、薄茶色の目がのぞいていた。「米国西部の生まれ。農場主の長男で二十二歳」と名乗った。背広のポケットから取り出したIDカードには、米陸軍の四等特技兵とあった。

彼が語ったところによると、大学に在学中に徴兵を受け、一九六九年六月、衛生兵として南ベトナムに派遣された。まもなく、戦闘で右足に負傷し、神奈川県座間市の米陸軍病院に入院。全治後、同病院に衛生兵として勤務していたが、同年暮れに脱走、病院近くの日本人女性のアパートにひそんでいた。一度MPと日本人警官に踏み込まれたが、押入に隠れて逮捕を免れた。その後、JATTECのメンバーの訪問を受けたという。

それ以後は、学生、広告業者、教師などの日本人家庭を転々とし、いまの隠れ家が十一軒目。隠れ家から隠れ家への移動は車か電車。JATTECのメンバーがつきそってくれる。「脱走の動機は？」との問いには「以前から政府のベトナム

ただきたい」。提示された額は十五万円だった。高いな、とも思ったが、即座に私は「払います」と伝えた。

当時、社会部には、社外連絡費というのがあった。取材上の必要から取材相手に経費なり謝礼を払う場合は、この社外連絡費が充てられていた。ただし、事前に上司の承認を得る必要があった。しかし、いったん会社に戻って承認を得る時間もないし、それではなんともかっこう悪い。で、私は独断で約束した。

会社に戻って上司に報告すると、上司は「高い。十万円にしてもらえ」という。しかし、すでに約束してきたことだから、いまさらまけてくれとは言えないし、どうしてもやりたかった。私は、上司が認めた額に自分のポケットマネーを上乗せして支払った。

小中氏から「三月十八日夜七時三十分に赤坂のTBS本社近くの喫茶店まで来てほしい」との連絡があった。私たちはそこへ行った。私たちは二人だった。連れ合いは当時、社会部の同僚だった伊藤正孝記者（その後、アフリカ支局長、朝日ジャーナル編集長などを経て編集委員。故人）。私は語学がだめだったから、英語のできる伊藤記者に助っ人として同行してくれるよう頼んだのだ。

定刻きっかりに若い男性が現れた。私たちはそこから車に乗った。車は大都会の闇の中を走り出したが、南西の方向だ。男性は無言。ひっきりなしにタバコを吸った。時折、後

政策には疑問を感じていたが、ベトナムで同僚の悲惨な死を見、自分も負傷してみても、あらゆる戦争がいやになった」と語った。

私たちは三日間にわたってこの米兵と生活をともにしたが、米兵は暇をもてあましていた。朝起きて夜寝るまで、ほとんど応接室のソファに腰を沈めたままだった。「彼専用の部屋として書斎を提供したんですが、寝るとき以外は足を踏み入れません。一人でいると不安なのでしょうか」と隠れ家の奥さんは言った。三度の食事は隠れ家の家族といっしょに食べた。どんな日本食も口にしましたが、いつも小食だった。運動不足ゆえか。

食事と食事の間は本を読んだり、隠れ家の子どもを相手にトランプに興じたり、ときにはJATTECに買ってもらったというギターをかなでながら即興の歌をくちずさんだ。なんとも悲しげな歌だった。何もすることがなくなると、放心したような目つきで窓の外をながめていた。

「いま一番やりたいことは」と尋ねたら、「大声で叫びたい」。そして「街の中を思いきり歩きたい」と付け加えた。「こんな生活をいつまで続ける気なのか」と聞くと、「時々絶望的な気持ちに襲われる時がある。遠い将来のことは考えていない。いまは、とにかく平和な日本で暮らしたい」と語った。

三日目の昼前、私たちは、米兵に別れを告げ、隠れ家を離れた。隠れ家の周りには畑が広がり、路傍にはオオイヌフ

グリーが淡青色の小さな花をつけていた。戸外はもうすっかり春の気配。隠れ家に閉じこめられた形の緊張続きの三日間だったせいも、春めいた外の空気がひどくこち良かったことをいまでも鮮やかに覚えている。

数日後、私は神田の出版社を訪ねて行った。隠れ家の主人の勤め先で、主人に会って感想を聞くためだった。その人は五人家族だった。妻と三人の子ども。前年から脱走兵を受け入れており、私たちが会ったのは四人目。一人につき一週間から十日ぐらい。

脱走兵受け入れの動機を尋ねると、笑いながら言った。「昔から窮^{きゆう}鳥^と懐^{なつ}に入れば、という格言もあるじゃありませんか。困っている人があれば助けてやるのが当然」「私だってマイホームづくりで没頭したいですよ。でも、他人の城を守ってこそ自分の城も守れるのではないか。原爆が落ちるようなことがあったら、マイホームもバアだからね」。もつとも、不安もあるという。「しかし、心配しだしたらさきがない。腹をすえなくちゃあ、こんなことはできませんよ」

私の脱走兵インタビューは、三月二十四日付朝刊の「朝日」社会面に載った。トップ記事。「脱走米兵と暮した3日間」「町を思いきり歩きたい」「転々として十一軒」「戦傷で戦争がイヤに」などの見出しと写真つきだった。

JATECには、さまざまな人々がかかわっていた。多く

他の平和団体が、この時期、「ベトナム人民支援」を掲げ、運動を専らベトナム人への「援助」と位置づけていたのと対照的であった。それにひきかえ、ベ平連の運動は、人間として個人の「戦争責任」に向き合った市民の運動だったからこそ、脱走兵援助といった、危険な活動にもひるまなかった人々を生み出したのではないかと私は考える。

ベトナム戦争が終結してから二十六年たった二〇〇一年六月、私は東京・新宿の紀伊国屋ホールで、斎藤麟作の『お隣りの脱走兵』を観た。JATECによる脱走兵援助をテーマにした芝居だった。それを観ながら、脱走兵援助もついに芝居になったのか、との感慨を抱くとともに、あのいっしょに暮らした米兵は今、どこで何をしているのだろうかと思っただ。 (二〇〇六年一月一六日記)

第61回 エンプラ 闘争で 警官隊に なぐられ 負傷

それは、一瞬のことだった。私は黒い津波のような警官隊にコンクリート壁に押しつけられ、警棒の乱打を浴びた。頭

の知識人が関与していたが、一般の市民も多くかかわっていたようだ。日本人が脱走米兵に便宜を与えても、処罰されることはない。だが、刑事特別法によると、米軍は脱走兵の逮捕を日本の警察に要請することができ、要請を受けた警察は日本人の住居に立ち入って捜索ができる。さらに、関係者を参考人として取り調べることができ、これを拒めば一万円以下の過料を課せられるとされていた。吉川氏によれば「一九、二〇歳の若者、生身の人間と二四時間、しかも警察の目を逃れてつきあうのである。一見、スマートな活動のように思われたかも知れないが、実際は精神も肉体もズタズタになるような活動であった」(『市民運動の宿題』)のだ。にもかかわらず、こうした活動に少なからぬ市民が進んで加わった。

なぜだろうか。おそらく「困っている人があれば助けてやるのが当然」という素朴な人間愛、すなわちヒューマニズムがこの人たちを突き動かしていたのだろうと思う。加えて、ベ平連運動の論理が、反戦の実践をうながしていたのではないか。

ベ平連が掲げたスローガンの一つに「日本政府は戦争に協力するな」というのがあった。日本政府は米国のベトナム侵略に加担している。その日本政府を支えているのは日本人である。だから、ベトナムにおける戦争には日本人も責任がある。したがって、日本人一人ひとりも、日本政府への抗議を含め戦争をやめさせるために自ら行動を起こさなければ——ベ平連の論理はそういうものだったのではと私は思う。

皮がやぶれ、血潮が飛んだ。私はよろよろと立ち上がり、病院の方に歩き始めた。何が起きたのかわかるまでにしばらく時間がかかった。「そうだ。警官隊にめった打ちにあったのだ」。一九六八年一月十七日、長崎県佐世保市でのことである。

ベトナム戦争が激化の一端をたどっていた六七年暮れから六八年の正月にかけ、日本は米国の原子力空母「エンタープライズ」の日本寄港をめぐる世論がふつとうしていた。核燃料を推進力とする世界最大の攻撃型航空母艦で、基準排水量七五、七〇〇トン。全長三三六メートル。幅四〇メートル。艦載機は七十から百機。乗組員は四、〇〇〇人以上。六二年に完工、六五年から第七艦隊に配属され、ベトナム作戦に参加していた。「動く核基地」というのが異名だった。

六七年九月に米国政府から外務省に「乗組員の休養と物資の補給のために日本に寄港させたい」と申し入れがあり、同年十一月、佐藤榮作内閣は寄港承認を米側に通告した。社会は「エンタープライズの寄港承認は、米国のベトナム侵略への佐藤内閣の協力、加担がさらに強まったことを示す。北爆の拡大に重要な役割を持つ原子力艦隊を入港させることは、日本がベトナム侵略の直接の基地化することを意味する。社会党は広範かつ強力な寄港阻止のたたかいを展開する」との声明を発表した。